
HUNTER × HUNTERの世界

クルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTER×HUNTERの世界

【Nコード】

N7183Z

【作者名】

クルト

【あらすじ】

HUNTER×HUNTERに行くことになってしまった主人公の奮闘記

旅立ち（前書き）

完全初心者が趣味で書いているものなので誤字や文面がおかしい部分もあるかと思いますが、それでもよろしければ読んでみてください。い。

旅立ち

ここはどこだ？天国か？

目が覚めると、真つ白な何も無い空間を漂っていた

「おい、お前のせいで父上に怒られたんだぞ、責任とれよ」

声のする方を振り向くとさっきまでは誰もいなかったはずなのに、偉そうな態度の子供がいた。

「いきなりなんなんだよ、それよりここどこだ」

「めんどくせえやつだな>ゴツン<？)><」

「八つ当たりするでない、お前のミスであろう」

子供の後から光と共に立派な髭を生やした爺さんが現れ、杖で子供の頭を叩いた。

「いきなり何するんですか父上」

「もういい、お前は黙っておれ、少年よいきなりで混乱していると思うが」

落ち着いて聞いてくれないだろうか」

取り乱しても何も解決しないだろうと思ひ。

「分かったまずこの状況を説明してくれ」

「まず自己紹介からするかのうわしは神じあ、

そしてこのバカ息子に人間界の寿命の管理を任せていたんだが、

このバカ息子のミスでおぬしの命の源であるロウソクを消してしまつたのじあ、

本当に申し訳ないお前も謝らんか」

「すみませんでした」

「どうゆうことだよそれ！」

「こんなこと絶対にあつてはならんのだじあがと言つておぬしを生き返らせる訳にもいかんだ、

そこで二つの選択肢を選んでもらう、一つはこのまま天国に行くか、もう一つは別の世界に行ってもらう、

その世界はマンガのHUNTER×HUNTER×HUNTERじゃもちろん謝罪の意味も込めて特典はつける2個までだ、

あと不死とかはなしじゃ

「なんでHUNTER×HUNTERなんだ？」

「わしが好きだから・・・」

「特典の内容は俺が決めていいんだな、少し考えさせてくれ」

HUNTER×HUNTERあの世界は誰がいつ死んでもおかしくない死と隣り合わせの世界だ、

慎重に考えないとすぐに死んでしまう。

「まず、努力した分だけ結果がでる体、（訓練しても結果がでないと意味がないからな）

二つ目は修行ができる空間で効果は、その空間で何年たっても年を取らないそれと修行内容にあった環境を再現できる効果をつけてくれ、これは俺の念能力とは関係ないものに

（能力のメモリーの無駄使いはしたくないからな）」

「ん〜一つ目はいいが、二つ目については少し厳しいのう、制約を付けるぞ、

無制限は無理じゃあから使えるのは1回だけ部屋の使用時間は20年」

「容姿は特典の範囲なのか？」

「それはサービスじゃあから心配ない」

「だったら白髪で目の色は緋色で」

「それじゃあどうする修行してからHUNTER×HUNTERの世界の送るでいいかの？」

「それでいい」

主人公設定（前書き）

修行及びハンター試験合格については割愛させてもらいます、
一ツ星ハンターになったところから本編は開始させてもらいます。

主人公設定

名前：クルト

性別：男

性格：慎重に考えてから行動タイプ

年齢：23歳（原作開始時）

職業：一ツ星ハンター（ブラックリストハンター）

容姿：白髪に緋色の目（緋の目ではない）

髪型は、さわやかナチュラルヘア

系統：変化系

能力：閻牙（具現化系、変化系の複合技）

日本刀の柄を具現化し柄にオーラを込めることでオーラの刃をつくる、

ほかに電気や水（蒸気、氷）風の刃に変化させることもできる、

2本具現化できるがオーラの消費量が2倍に増える。

鞘も具現化可能で抜刀術も可能

（烈火の炎の閻水をイメージして作った）

制約

・常に刃を維持するためにオーラを消費する。

・電気、水（蒸気、氷）、風の刃に変化させるとオーラの消費量がオーラの刃の2倍消費する。

・閻牙を具現化せずにオーラを電気、水（蒸気、氷）風に変化させると

威力及び効果が6割減少する。

風神雷神（変化系、強化系の複合技）

末梢神経を電気に耐えられるように強化し直接電氣流し込

み、

体に風を纏い高速戦闘を可能にした、

にオーラを電気、

闇牙の制約で（闇牙を具現化せず

水（蒸気、氷）風に変化させると効果が6割減少する）
とあるが闇牙を具現化してさえいれば
100%の効果で使用可能

（キルアの神速を参考にして作った）

制約

・ 1日に使用可能時間は10分で能力発動から10分たつ
と自動的に強制解除され

24時間使用不可能になる

主人公は常に日本刀を2振り常に持っていて格下相手にはそ
れで対応する。

第287期ハンター試験原作介入（前書き）

主人公設定で少しだけ追加しました、
今後もこういったことがよくあると思いますので
そこは責めなくてももらえると助かります。

第287期ハンター試験原作介入

修行を終えた俺はハンターになるために、第284期ハンター試験を受け合格した、

20年ひたすら修行したかいもありあっさり合格した、

原作が第287期ハンター試験なので原作の3年前みただ

原作に介入しよう決めていた俺は実戦での戦闘経験を積むために賞金首を探して世界を飛びまわる生活をしているとその功績が認められ

3年後一ツ星ハンターになることができた。

どうゆう方法で原作介入しようか悩んでいると

『プルルル』

携帯がなり番号を確認するとネテロ会長だった

ネテロ「クルト仕事の依頼があるんじあが第287期ハンター試験の試験官をやってくれんかの」

原作介入できるチャンスと思った俺はその依頼を受けることに決めた、

指定された場所に向かうとメンチと組んで試験官をやってくれと言われた、
会長からメンチは食の試験をするらしいから暴走しないか監視してほしいと、

ある賞金首を追っていた時にメンチと知り合い食のことで意気投合

した俺なら

暴走しても止めることができるだろうとの判断だった。

メンチ「ところでクルト試験内容は何になるの？」

クルト「薬草にしようかと思う」

メンチ「薬草ってもしかしてあれのこと？あんたもイジワルね」

試験会場となっているビスカ森林公園には香辛料で

有名なパドキアという珍味の薬草がある、

薬草を取ってくる簡単そうな内容だが問題は薬草のある場所が問題だった

魔獣の巢のすぐ近くにしか生えない薬草なのだ魔獣の強さはそれほど強くないので

受験生を試すには丁度いい内容になっている

原作でのブララの試験内容にしようと思ったが、あんなとんでもない量の豚の丸焼きを

処理できる胃袋は持っていないため、この試験内容したのであった。

クルト「メンチは何にするんだ？」

原作知識はあったが確認のために聞いておくことにする、

現段階でもブララの位置に俺がいることで原作を変えているため今後どう原作が変わっていくか分からないからだ。

メンチ「寿司にしようかと思ってね」

クルト「寿司は海鮮魚だろうここには川しかないから味にこだわるなよ、

洞察力を試す試験が味の試験に変わると意味ないからな」

メンチ「分かってるわよ、そんなことぐらい」

クルト「それならいい、そろそろ時間だな」

『ボーン』

試験開始だゆつくりと扉が開いて受験生が見えてきた原作組はちゃんと

一次試験に合格してるみたいだ主人公組に会えたことに少し感動しつつ表情に

出さないよう受験生を観察する

メンチ「おまたせ、そんな訳で二次試験は私たち美食ハンターが担当するわ」

クルト「美食ハンターって俺は違うぞ」「いいじゃないそんなこと関係ないわ」「

いや関係無いことないと思うんだが・・・まあいいか

レオリオ「美食ハンター?!」

クラピカ「美食ハンターとはあらゆる食材を探究しさらに新たな美味を創造する

ハンターのことだ」

さすがクラピカよく知っている、まあハンター目指すならそれぐらい知ってて

欲しいが知らないって受験者多いからな

メンチ「二次試験の課題は料理よ」

料理！

まあ気持ちは分からなくないがな、いきなり料理が課題と聞かされると、

ただそれはメンチの前では禁句だほら機嫌が悪くなった

メンチ「不満がある人は今すぐ帰っていいのよ」

メンチの言葉に黙る受験生一同

クルト「ではまず俺から課題を出すこの写真にあるパドキアの葉を取ってきたもろう、

写真は人数分あるから心配いらぬ制限時間は2時間パドキアの葉を俺に

渡したもののだけが次のメンチの試験を受ける資格を得る、

なおこの試験で他の受験生から奪うなどの行為をしたものは即刻不合格とする、

常に監視しているから注意するようにそれでは二次試験開始!!」

いっせいに散っていく受験生全ての受験生が見えなくなったのを確認して

クルト「メンチ落ち着け」

メンチ「分かってるわよ、でもあいつが」

あいつとはヒソカのことだ、俺達の姿を見た瞬間他の受験生に解らないように念で威嚇してきてるからだ

クルト「気にするなそれに狙いは俺だろあいつ俺の正体に気づいてるな」

さまざまな賞金首を捕まえてきた俺は一部のものたちには有名にな

っている、

白き閃光のクルトと言う異名までついてしまったのだ
俺の能力風神雷神を見たものがつけたらしい

2時間後。

結果は忠告したのにズルしようとした奴などいたが、原作組は全員
合格していた

52名少し少なくなってしまったが仕方ないこれぐらいクリアでき
ないと

ハンターなどやっていけないからだ、

さてと問題は次だな暴走するよなやっぱり

メンチの暴走

メンチ「二次試験後半私のメニューは寿司よ」

寿司？

全く分からない受験生のためにヒントを出していくメンチしばらくすると、

403番レオリオが自身満々にレオリオスペシャルを出してきた、
どんなものか知ってはいたがあれは笑いをこらえるには苦労した
あれは料理ですら無い……

その後も次々と料理をもってくるがこいつらセンスがなさすぎるぞ
ハンゾーが寿司を作ってきたが美味しくないからダメだった、
それを聞いたハンゾーがついに爆弾を投下した

ハンゾー「なっなんだとっ！握り寿司ってのは一口サイズの長方形
に握って

その上にワサビと魚の切り身をのせるお手軽料理だろうが……！」

あ……あこうなることは解っていたがこれでほかの受験生にバレた、
それを聞いたメンチはキレてしまい味の審査になってしまった

クルト「メンチいい加減にしろ」

メンチ「黙ってて」

これ以上美食ハンターでもない俺が言っても逆効果だと判断した俺
は、

会長であるネテロに電話をかけることにした

ネテロ「なんじあクルト」

クルト「会長の言った通りメンチが暴走し初めてましてだから言ったじあないですか美食ハンターでない俺が

何言っても逆効果だとこちらに来て会長から注意してもらえませんか」

ネテロ「しかたないの〜〜〜」

電話を切った俺はやっぱり全員不合格か会場の雰囲気最悪だ

『ドーン』

255番「納得いかねえな、とてもハイそうですかと帰るきにならねえ、

俺が目指してるのはコックでもグルメでもないハンターだ！！しかもブラックリストハンター志望だぜ美食ハンターごときに合否を決められるのは納得いかねえって言ってるんだよ」

名前を忘れたがアホが文句を言っているこいつハンターを舐めてるだろ

メンチ「美食ハンターごとき？」

まずいなメンチはこいつを殺すつもりだ、あいつの発言には俺も力チンとくるが

試験官が直接手を下すのはまずいそう思った俺は

『シユ．．．ドーン』

一瞬で数Mの間合いを詰めて255番を念を込めてないパンチで約10Mほど殴り飛ばした、

俺の動きが見えていたのは受験生だと2人だけヒソカとイルミだ

クルト「メンチにも落ち度はあるがハンターを舐めるものいい加減にしる

貴様ごときがハンターを愚弄するな、

次の試験のことを考えて手加減したが次はないと思え!!!」

255番「何するんだてめえ」

俺が殴ったことでメンチは少しだけ落ち着いてきてるみたいだ

メンチ「255番あんたブラックリストハンター志望だといったわね、

それなのに彼のことも知らないなんてお笑いぐさね、

それにブラックリストハンター志望?笑わせんなつつゝの

ハンターの中でも最も危険な分類に入るものよあんたなんか話にもならないわ」

俺の動きや外見から判断したのかクラピカが

クラピカ「まさか.....その白髪に緋色の目のブラックリストハンター.....」

もしかして白き閃光のクルト実感23歳にして一ツ星ハンターになった」

やっぱりクラピカは知ってるみたいだな

彼もブラックリストハンター志望だから知っていても不思議じゃないからな

クルト「白き閃光と言うのは大げさだが多分それで違いない、今ハンター協会に対応もらっているからおとなしく待っている」

それを聞いたメンチはこちらを睨んでたが受験者一同は少し安心したのかさつきよりも場の空気が静かになった、
変わりにヒソカからの挑発が強くなった、

少しするとハンター協会のマークが入った飛行船が到着すると飛行船から飛び降りる人影が見える
登場がいくらなんでも派手すぎるだろ会長！

会長の説得もあり原作通り再試験になった課題は「湯で卵」
俺はこの世界の非常識さに慣れてしまっているがあんな断崖絶壁からちゅうちょなく飛び降りることのできることをできる原作組には呆れる

結果255番は戦意喪失でリタイア二次試験合格者は42名となった

第287期ハンター試験終了(前書き)

二次試験が終了した所ですが主人公は試験官であるため、試験終了まで割愛させていただきます。

第287期ハンター試験終了

二次試験が終了し三次試験会場に移動中の飛行船のとある一室
試験官であるサトツ、メンチ、クルトが集まり雑談している

メンチ「ねえ、どう思う？一度全員落としといて言うのもなんだけ
どさ、

なかなかの粒ぞろいだと思うんだけどね、私294番^{ハンター}
なんか光ってたとおもっただけだサトツさんどう？」

サトツ「ん〜そうですねルーキーがいいですね今年私は私は断然99
キルア
番ですな」

メンチ「クルトはどう思った？」

クルト「ルーキーで言えば404番彼は^{クラヒカ}全体的にバランスがいいし
頭の回転も速そうだそれ意外だと44番^{ヒンカ}だなあれは異質だ」

サトツ「彼は我々と同じ穴の貉です、ただ彼は我々より暗い部分を
好むようですが」

ヒソカについては警戒しておくぐらいでいいだろう、
試験中に戦闘になることはないと思うが警戒しておいて損はないだ
ろうからな

受験者のほとんどがぐったりとして次の試験に向けて英気を養って
いる、

三次試験会場であるトリックタワーに着いた

ここから最終試験までは介入することができないので
最終試験まで念の基礎等、訓練に励むことにするツエズゲラのように
サボって基礎をおろそかにしていると後で痛い目にあうことは分か

っているので、
俺は一日たりとも基礎訓練を欠かしてない。

四次試験が終了した、合格したメンバーを聞いた俺は
少し驚いたメンバーが一名増えているからだ原作だと9名

(ゴン、レオリオ、クラピカ、キルア、ハンゾー、ヒソカ、
イルミ、ポックル、ボドロ)だった。がポンスが増えていた詳しく聞
いてみると、

レオリオのターゲットがポンスではなく、同じくポンスのターゲッ
トも

バーボンではなく他の受験生だったらしいやはり俺が介入したこと
によって

多少の誤差が出ているみたいだ原作でのポンスの死にかたに

多少の不満があった俺はもしポンスが合格し縁んがあれば
ポンスを鍛えることも有りなんじゃないかと思うようになった。

最終試験を終わった結果はゴン、レオリオ、クラピカ、ハンゾー、ヒ
ソカ、

イルミ、ポックル、ポンスの8名やはりキルアは暴走してボドロを
殺した、

ゴン達はキルアの救出に向かうようだ、俺はこれ以上ゴン達に関わ
って

原作崩壊してしまうことを避けるためにキメラⅡアント編まではじ
つくり

待つことにする今まで賞金首を捕まえる生活ばかりしていたのでゆ
つくりと

世界を見て回りたいたいと思ひ皆に挨拶をして会場を後にした。

(ちなみに主人公の原作知識はキメラⅡアントの王宮突入までしか

ない
)

出会い

最終試験会場を後にした俺はアジト（家）に戻り今後どう行動するか考えるために列車での移動中

（列車等公共の移動手段を用いる時身分証明として

ハンターライセンスの提示が義務とされているが、

それは同時にライセンス狙いの請負人を呼び寄せることに

つながるので対応が面倒になる、それを避けるために

主人公は公共の移動手段を用いる時に

ライセンスの提示はしないことにしている

入国の時にはライセンスの提示はしている）

時間を潰すためにまだ読みきつてない小説を時間があるので読んで
いると

「いきなり何するのよあんたたち！」

『プシュ、プシュ、プシュ』

『ブ~~~~~ン』

なんだこれ蜂！くそっやっかいなこれでもくらえ！

『シュ~~~~~』

何やら外が騒がしい、気になったので声のする方に行ってみると
全身黒ずくめのマスクを被った、サイレンサー付きの拳銃を持った

男たちと

無数の蜂が戦闘状態になっていた

これこの臭いは．．．．．催眠ガスか

ガスによって眠らされた蜂達が次々とおちていく

クルト「まさか．．．．．蜂．．．．．考えるのはあとだ、
とにかくこいつらを先にかたずけるか」

こいつら程度に念を使うまでもないと判断した俺は
男たちの首目掛けて手刀をはなち気絶させることにする

『シュ．．．シュ．．．バタツ』

手錠を男たちにはめて次の駅で警察に引き渡した俺は、
ターゲットになった人物を確認することにした

クルト『（やっぱり予想道理か．．．．．）』

現場となった一室には気持ちよさそうに寝ている少女ポンスであった
同じく眠っている蜂たちを回収し終えた俺は
ポンスが起きるのを待つために先程の小説を読み始めるのであった

（ポンス side）

最終試験を終え無事ハンターになれた私は今思えばかなり浮かれていた

ゴン達はキルア救出に向かうと言うがそんな危険なことをしたくない
私はゴンの誘いを断りハンターとしての活動を開始するために
ヨークシンシティに向かう列車に乗った

車掌「切符を拝見いたします」

切符と一緒にライセンスの提示をすると車掌が少し驚いた顔をした

ポンス「身分証明として提示が義務でしたよね？」

車掌「本物ですお返しします」

この行動によって生じる危険などこの時は
全く予想もしていなかった……

『ガチャ』

いきなりドアが開いたと思ったたら黒ずくめの男達がいきなり銃を突きつけてきた

ポンス「いきなり何するのよあんたたち！」

『プシュ、プシュ、プシュ』

いきなりのこと動揺する私が弾をよけることができたのは奇跡としかいえない、

私に攻撃してきた男達に蜂が一斉に攻撃を開始した

『ブ~~~~~ン』

なんだこれ蜂！くそっやっかいなこれでもくらえ！

『シュ~~~~』

一人の男がはなった煙を吸ってしまった

私はろくな抵抗もできないまま眠気が襲い

眠ってしまったのであった

ポンス「(せっかくハンターになることが出来た.....)

」

このあとの出会いで人生が大きく変われることをこの時は知るよしもないポンスであった

「.....」

もう見てられなかった俺は

クルト「ポンス覚悟があるのならは戦うための力を教えよう、ただその力を手に入れるともう後戻りはできない」

ポンス「.....お願いします」

クルト「俺のことはこれから師匠と呼ぶように、

それと俺の言いつけはちゃんと守るように」

ポンス「はい！、師匠よろしくおねがいします！／＼／」

アジト

ポンズ「……………師匠…どこにむかってるんです？」

列車を降りた俺達は森の中を歩いている

クルト「すまん説明してなかったな心配いらない、俺のアジトだ、これから教えるのは人に見せびらかす物でないんでな、

不安だと思うが今は俺を信じてくれとしか言えない」

ポンズ「いえっ！疑ってるわけじゃなくて…」

クルト「これから教えることは早くても半年で基礎が出来ると思ってもらえばいい」

2時間ほど森の中を進んで行くと検問と20mもある屏が見えてきた

「私有地にて立ち入り禁止無断で侵入した場合の生命の保証はし兼ねます」

と看板に大きく書かれていた

門番がこちらに気がつき

門番「お帰りなさいませ、クルト様、そちらのお連れ様は？」

クルト「弟子をとることになってな」

ポンスは状況をつかめていないのか唾然としている、それから多数人とすれ違い、

みな お帰りなさいませ と挨拶する

ポンス「さつきから気になってたんですけど、あの方達は？」

クルト「ここの管理を任せてるんだ」

30分ほど進むと洋風と和風の一軒家が見えてきた

ポンス「ここが師匠の家なんですか？」

クルト「ああ、そうだここら一帯は俺の私有地だから誰の邪魔も入らない、

今日は疲れただろうこの家を貸すから好きに使ってもらっていい
ポンス、君は修行にのみ集中してくれたらいい」

と言って洋風の一軒家を指さす

（ポンスside）

列車を降りて私達は森の中を歩いている、私はだんだん不安になってくる、

もしかして騙されているんじゃないかと思いきる恐る恐る聞いてみる

ポンス「……………師匠……………どこにむかってるんです？」

そんな空気をさっしたのか師匠が

クルト「すまん説明してなかったな心配いらない、俺のアジトだ、これから教えるのは人に見せびらかす物でないんでな、

不安だと思うが今は俺を信じてくれとしか言えない」

私は焦って

ポンズ「いえっ！疑ってるわけじゃなくて・・・」

それから2時間ほど森の中を進んで行くと検問と20mもある屏が見えてきた

「私有地にて立ち入り禁止無断で侵入した場合の生命の保証はし兼ねます」

えっ(；。)！

どうゆうこと？

黒服の女性がこちらに気がつき

門番「お帰りなさいませ、クルト様、そちらのお連れ様は？」

クルト「弟子をとることになっとな」

.....もしかしてこいつって師匠の家？

それから黒服の女性と数人とすれ違い、
みな お帰りなさいませ と挨拶する

ポンス「さつきから気になってたんですけど、あの方達は？」
クルト「ここの管理を任せてるんだ」

ポンス（なんで女性ばかりなんだろう・・・）
みな女性であることに少し不機嫌になるポンスだった

ポンス（今日はいろんなことが有りすぎた明日のためにも早く寝よう）

ポンス side End

ポンズの修行

クルト「ポンズ今日から修行にはいるが、これから教える技のことを念と言っ、まずその危険性を認識してもらっ」

ポンズ「危険性ですか？」

クルト「そっちに立って見てくれ、今から君を殺すと思っ、口にしたほうが分かりやすいだろう」

ポンズ「??????」

クルト「君を殺す!!!!!!」

クルトはポンズにオーラをぶつける

『バタツ……………』

ポンズ「……………はあ……………はあ」

オーラの発動をやめる

クルト「大丈夫か？、少し休憩しよう」

ポンズ「……………はい」

ポンズ「（何なの今のただ殺すと言われたただけなのに
師匠からまるで深海にいきなり放り出されたようなすごい嫌な感
じがした）」

クルト「何が起こったか全くわからないだろう、さっきは俺が君に向けて念を使ったもちろん手加減はしたが、もっと分かりやすくやって見ようか」

クルトはトランプを取り出すと念を込めて木目掛けて投げるとトランプが木を貫通し地面に刺さる

クルト「これが念だ、念は体からあふれる生命エネルギーを自在に操る技術のことだ、その生命エネルギーのことをオーラとも言う

普通はオーラは垂れ流し状態でそれと肉体にとどめる技術を纏言つ、纏によって常人よりも体は頑強になり若さを保つことができるようになる

大事なのはここからだ悪意をもって無防備な人間を攻撃したらオーラで

殺すこともできる、それを防ぐにはどうしたらいいと思う？」

ポンス「自分も念を覚えるですか？」

クルト「正解だ、でないと・・・」

クルトはてのひらを地面に当てオーラを放つ

『ドーーーーー』

直径3mのクレーターが出来る

クルト「肉体は粉々になる」

真っ青になるポンズ

クルト「ポンズにはまず纏を覚えてもらおう方法としては瞑想を取り入れてゆっくり時間をかけてやることになる、根気強くやることになるので覚悟すること

それと併用して肉体の強化に務めてもらうことになる、いくら強いオーラを持っていても肉体が貧弱なら強い力を手にすることは出来ない」

クルト「それでは早速始めようか」

1ヶ月後

クルト「（もう少し時間がかかると思ったがこんなに早く纏の習得に成功するとはな）」

その後もポンズは順調に絶、練、凝を習得していった

修行開始から三ヶ月

クルト「そろそろ発の修行にはいるうか強化系、変化系、具現化系、特質系、操作系、放出系の六系統に分類される、さまざまな要因から必ずこのどれかに当てはまることになる」

ポンス「あの〜どれに当てはまるかどうかどう判断するんですか？」

クルト「水見式という方法があるこの変化によって系統の判断をする、

試しに俺がやって見るぞ」

水を入れ葉っぱを浮かべたグラスを用意しグラスに向けて練を行う

ポンス「・・・・・・・・・・・・・・・・何も変化が無いようですけど」

クルト「水を舐めてごらん」

ポンス「嘘っすごく甘い！！なんで？」

クルト「水の味が変わるのは変化系の特徴だ、

これは重要なことだから言うておくが

むやみやたらと自分の系統を他人にばらすのは良くない」

ポンス「・・・・自分の系統を知られると

対策を取られることがあるからですか？」

クルト「そうだ、そのせいで命取りになることもあるから注意するように」

ポンス「なら師匠はなんで私にみせたんですか?!」

クルト「信用してるからだ、短い間だけ君を見ていて

信用できると思ったから見せたそれだけだ」

ポンス「ありがとうございます／＼／＼」

クルト「ポンスもやってみるといい」

ポンスが練をすると．．．．．変化がないように見える

ポンス「味も変わってない私才能がないんですか．．．．」

クルト「よく見てみるといい不純物がみえるだろこれは
具現化系の特徴だ、この修行をこれから増やしていくぞ」

ポンス「はい！」

さらに半月後．．．．．

クルト「ポンスこれで基本となる四五行が終了した、
裏ハンター試験合格だ」

ポンス「裏ハンター試験？」

クルト「念の習得はハンターになるための最低条件ポンスはやっと
スタートラインに立てたということだこれで卒業だ」

ポンス「ありがとうございます、でもよかったですらなんですけれども
修行を付けてもらえませんか？」

クルト「．．いいだろう、ただ今までよりも厳しくいくぞ」
ポンス「はい！／／／」

第287期ハンター試験より2年がたった

ポンスの発が形になったので俺はハンターとしての活動を再開した、
幻獣ハンターとしての活動をするものだと思っていたポンスは
ハンターとして俺のそばで学びたいと懇願され断りきれなかった俺は
今もまだポンスと共に行動している

クルト「（あんな涙目で言われたら断れないだろう．．．）」

キメラⅡアントまであと1年

（主人公が原作介入したことによりヨークシンシティ編、キメラⅡ
アント編の

時期がずれています主人公はキメラⅡアントまで介入しないように
決めていたが

巻き込まれていくのでご了承ください）

ポンスの能力

名前：ポンス

性別：女

年齢：18歳（ハンター試験合格時）

職業：プロハンター

系統：具現化系

能力：雀蜂スズメバチ（具現化系）

切る、刺すなどすると蜂の羽のような模様

（蜂紋華ほうもんか）が現れる

蜂紋華が現れている間に、攻撃が傷に当たると

相手を10分間強制的に絶の状態にする

（ブリーチの碎蜂の斬魄刀の雀蜂）

制約

- ・蜂紋華が現れるのはポンスが飼育している蜂の数まで。
- ・具現化を解除及び攻撃があたってから5分たつと蜂紋華が消えてしまう。
- ・蜂紋華が消えてしまった所に攻撃しても能力は発動しない。

スピアーズ（操作系）

蜂を操作し、操作した蜂の視覚、嗅覚を共有できる、

ポンスを刺すことで5分だけ

ポンスの身体能力が1.5倍に増えるただし、

制約にて（攻撃と判断される行動を蜂に命令すると蜂が死んでしまう）

とあり実行後には蜂は死んでしまう

制約

可能。

- ・自らが卵から育てた蜂でないと操作できない。
- ・蜂は10匹までしか操作できず、常に10匹しか飼育不

可能。
(例：蜂が2匹死んでしまうと2匹新たに卵から育てることが可能)

う。
・攻撃と判断される行動を蜂に命令すると蜂が死んでしま

- ・操作可能範囲は半径5kmまで。
- ・蜂1匹が物を運べる重さは5kgまで。
- ・蜂の針には毒がない。

主人公と修業中毎日組手をしていたため、近接戦闘が得意になっています。

念能力に関する基本的な説明（HUNTER×HUNTERを読んだことのない

システム）

・強化系

モノの持つ働きや力を高める能力。主に自分自身を強める能力者が多い。

自分自身を強化すると、攻撃力だけでなく防御力や治癒能力も高まるため、

戦闘面では最も安定して強いシステムとも言われている。

水見式ではグラス内の水の量が変化する。

・放出系

通常は自分の体から離れた時点で消えてしまうオーラを、体から離れた状態で維持する技術。

このシステムの能力としては、単純にオーラの塊を飛ばす技が最も一般的である。また、体外に離れた人の形などに留め操作系の能力で操作するという使い方もある。

水見式ではグラス内の水の色が変化する。

・変化系

自分のオーラの性質を変える能力。

オーラに何かの形をとらせる技術も変化系に分類される。

オーラ自体を別の何かに変えるという点では、

具現化系と共通点のあるシステムであるが、

変化系はオーラの形状と性質を変化させ、

具現化系はオーラを固形化させ物に変えるという違いがある。

水見式ではグラス内の水の味が変化する。

・操作系

物質や生物を操る能力。

オーラ自体に動きを与える能力や、他の何かにオーラを流し込みその動きを操る能力もある。前者である場合、具現化系・放出系など

他の能力と併用することが多い。

逆に後者の場合は操作系能力単体で完結することも可能であるが、

道具などを操作する能力である場合、道具に対する愛着や使い込みが

能力の精度に影響することが多く、その道具を失うと

能力が発揮できなくなるリスクがある。

水見式では水面に浮かぶ葉っぱが動く。

・具現化系

オーラを物質化する能力。

オーラに形を持たせるといふ点では変化系と共通する部分がある。

オーラを物質化するほどに凝縮するには相当に強いイメージが必要である。

物質化したものに特殊な能力を付加する者が多い。

また、人間の能力の限界を超えたものは具現化できない

水見式ではグラス内の水の中に、不純物が生成される。

・特質系

他の5系統に分類できない特殊な能力。

血統や特殊な生い立ちによって発現する。

他の系統に属する者でも後天的に特質系に目覚める可能性がある。

特に特質系と隣り合う操作系と具現化系の能力者が特質系能力に目覚める可能性が高いとされている。
水見式では上記以外の変化が起きる。

〈四大行〉

念の基本となる修行。

・纏マシ

オーラが拡散しないように体の周囲にとどめる技術。
纏を行うと体が頑丈になり、常人より若さを保つことができる。

・絶ゼツ

全身の精孔を閉じ、自分の体から発散されるオーラを絶つ技術。
気配を絶つたり、疲労回復を行うときに用いられる。

・練レン

体内でオーラを練り精孔を一気に開き、通常以上にオーラを生み出す技術。

・発ハツ

自分のオーラを自在に操る技術。
念能力の集大成。必殺技ともいわれる。

〈念の応用技〉

応用技は四大行と比べ疲労が激しい。

・周シユウ

「纏」と「練」の応用技。

物にオーラを纏わせる技術。刃物の切れ味を強化するなど、

対象物の持つ能力を強化する。

・隠イシ

「絶」の応用技。自分のオーラを見えにくくする技術。

「凝」を用いても、全ての「隠」を見破ることができるとは限らない。

・凝ギョウ

「練」の応用技。オーラを体の一部に集め、増幅する技術。

オーラを集中させた箇所は攻防力が飛躍的に上昇し、

その他身体能力も上がる。

目に集めてオーラを見ることも意味する。

熟練者は「隠」で隠されたオーラをも見ることができる。

・堅ケン

「纏」「練」の応用技。

「練」で増幅したオーラを維持する技術。

念での戦いは主に「堅」を維持したまま闘うことになり、

これが解けると防御力が著しく落ちるため、

よほど実力に差がない限り一瞬で敗北という状況にもなる。

維持する時間を10分間伸ばすだけでも1か月かかると言われている。

・円マシ

「纏」「練」の応用技。

体の周囲を覆っているオーラを自分を中心に半径2m以上広げ、1分以上維持する技術。「円」内部にあるモノの位置や形状を

肌で

感じ取ることができる。

・硬コウ

「纏」「絶」「練」「発」「凝」を複合した応用技。
練ったオーラを全て体の一部に集め、

特定の部位の攻撃力・防御力を飛躍的に高める技術。

「凝」の発展形とも言える。「凝」による強化との違いは、

「絶」を併用してオーラをより強く集中するため、

攻防力が桁違いに高いということである。その代わり、

オーラを集中していない箇所はオーラが薄くなるのではなく、「

絶」状態に

なってしまうため、攻防力は「凝」の時よりもがた落ちする。

・流リュウ

「凝」の応用技。

オーラを体の各部に意識的に振り分ける技術。

「凝」の項目にあるとおり、「凝」は他の部位の攻防力が落ちるので

リスクをとまなう技術である。

「流」による攻防力移動は、

念能力者同士の戦いにおいて基本であるとともに、奥義でもある。

ポンズの修業中のある日

（ポンズ side）

修業中のある日のこと

ポンズは前から気になっていたことを聞いて見ることにした、ただ師匠に直接聞く勇氣はなかったので

ポンズ「あの、なんでここで働いている人が女性が多いんですか？」

執事「それは………。クルト様を勘違いしないでくださいね」

ポンズ「それはどうゆうことですか？」

執事「クルト様は私たちの恩人なんです、

ここで働いているもののほとんどが元奴隷や虐待などを酷い扱いを受けてきたものがほとんどなんです、

クルト様はそんな私たちを救ってくださいただけでなく、

この地で暮らして行けるように配慮してくださいっているんですから私たちはせめてもの恩返しのために

クルト様の留守を守っているだけなんです」

ポンズ「すいませ辛いことを思い出させてしまって」

執事「いえ気にしないでください」

この日からポンズのクルトを見る目が少しずつ変わっていくのであ

つ
た

く
ポ
ン
ズ
s
i
d
e
E
n
d
く

依頼

クルト「（おかしい、いつまでたっても蜘蛛の情報が入ってこない
もうとつくに幻影旅団とマフィアアンコミュニティーの戦争が
終わっててもいい時期なのにやはり俺が関係してるのか．．．．．
少し調べてみる必要があるそうだな）」

ポンス「大丈夫ですか師匠？すごい考え混んでますけど」
クルト「少し気になることがあってな」

『プルルル』

アジトからの電話だ

クルト「どうした？何かあったのか」

「クルト様に仕事のご依頼です」

クルト「ありがとう、方法はいつもの通りで」

「かしこまりました」

ポンス「何かあったんです？」

クルト「たいしたことじゃない、仕事の依頼だ」

5時間後、一羽の鷺がクルト目掛けて飛んでくる、
足に付いた紙を回収する

クルト「ご苦労さん」

先程の方法とは伝書鷺のことだった

クルト「（これは・・・）」

手紙を見たクルトの表情が少し変わる

依頼者は十老頭

内容は幻影旅団の暗殺

まさかこんな形で介入することになるとは
予想もしてなかったのであった

十老頭からの依頼断るにしても直接あつてからでないはずいな
クルト「ポンズ、これからヨークシンに行くことになった、

今回はかなり危険な仕事だ」

ポンス「私も連れて行って下さい、足でまといにはなりませんから」
クルト「相手は幻影旅団の暗殺だと分かっててもか？」

ポンス「．．．．．幻影旅団」

クルト「依頼を受けるかまだ決めてないが
戦闘に巻き込まれる可能性が高い」

．．．．．二人に沈黙が支配する

クルト「だから>私にも手伝わして下さい<」

クルト「遊びじゃないんだぞ!!」

ポンス「．．分かってます、私の両親は幻影旅団に殺されました、
復讐してもお父さんやお母さんが喜ばないと言ったことも分かっています、

この上師匠まで居なくなっitingいままうかもしれないのを
黙って見てるなんてできません!!!!!!」

クルト「わかった、ただし今から言うことを守れないようなら
どんな手段を使っても追い返すからな、

まず依頼人との交渉は俺一人でやる
依頼を受けることになったら幻影旅団との戦闘は禁止する、

その代わりに蜂を使って俺のサポートをお願いします
間違っても戦おうなんて考えは起こさないように
これが守れるか？」

ポンス「はい／＼」

序章

俺は今十老頭の目の前にいる、

6大陸10地区を縄張りに行っている大組織の長達の依頼だ

慎重に交渉しないと俺が目を付けられるのは勘弁してほしいからな。

十老頭「と言うことで依頼をしたのだが引き受けてはくれないかな
クルト「幻影旅団ですか……」

俺の返答を聞いた十老頭は

十老頭「報酬が足りないと……」

沈黙が部屋を支配する、シビレをきらした十老頭の一人が

十老頭「それなら成功報酬100億ジエニーとある刀でどうだろうか？」

クルト「刀ですか」

話に乗った俺にチャンスだと思ったのか

十老頭「そうだ、君が刀のコレクターであると聞いたもんでね」

現世で日本刀に惹かれていた俺はこの世界で刀をコレクションをしていた

十老頭「君も名前を聞いたことがあるだろう……名を天空桜と言っ」

天空桜「この世でもっとも美しいとされる全てが純白の名刀だ
そしていくら物を切ろうが折れようと鞘に戻して時間が立つとまるで
新品のようになると言われている刀だ

少し考えた俺は

クルト「こちらの言う条件をのんでくれるのでしたら依頼を受けましょう」

十老頭「いいだろう言ってみてくれ」

クルト「まず天空桜は前金として頂きます、そして天空桜を取り戻そうと

計画された場合俺を敵に回すと覚えて置いて下さい……
報酬の方なんです但し俺が仕留めた証拠をそちらが確認し下さい
幻影旅団一人当たり20億ジェニーの報酬でどうでしょうか？
もちろん一人も仕留められない時は天空桜のみ頂いて
報酬は無しで結構です、依頼を受けておいて逃げることはしないので
安心してください」

十老頭「分かったいいだろう天空桜は今日中に渡すから
連絡があるまで自由にしてくれ」

交渉が終わり電話を取り出す

クルト「ポンス俺だ、依頼を受けることになった、
そこでポンスの報酬なんだが20億ジェニー振り込んでおくから
後で確信しておいてくれ」

ポンス「えっ．．．．．20億ってそんな大金私には」

クルト「これは俺からの依頼の報酬だから気にするな、

幻影旅団と直接でないにしろ接触するんだからこれぐらいは当然だ
ハンターやっていると金がいる場面も出てくるそれにハンターになって
即修行だったから懐が寂しいんじゃないのか？」

ポンス「それは．．．．．そうなんですけど」

クルト「それと約束については忘れるなよ

これが初のプロハンターとしての仕事だ気を引き締めていくぞ！」

ポンス「了解です師匠！！」

ポンスと合流した俺は5匹の蜂をポンスに付け残りを俺のサポート
に回すように

連絡があるまで細かい打ち合わせをしたのであった

連絡が来た、今回雇った暗殺チームの顔合わせをすることだ
天空桜を受け取った俺は指定された場所に向かう

部屋に入ると俺が最後のようだ、クラピカにシルバとゼノもいる

太ったマフィア「これで全員揃ったようだな、
それでは改めて十老頭からの依頼を伝える

依頼内容は幻影旅団の抹殺、今夜セメタリービルで開かれる競売に
またやつらが現れるかもしれない警備も兼ねて奴らが
現れたら始末してくれ、やり方はそつちで勝手にきめてくれ」

暗殺者1「連絡のさいのコードネームを決めておこうか」

暗殺者2「色でいいだろ、俺はレット」

暗殺者1「なら俺はブルー」

それを聞いた俺は呆れたこいつら本当にプロなのかと

ゼノ「まるでごっこじあの」

クルト「そうだな」

暗殺者1「なんか言ったかお前ら」

命知らずにもほどがある相手の力量すら分からないのかこいつらは

暗殺者2「お前らは？」

シルバ「シルバ」

ゼノ「ゼノじあ」

クルト「クルト」

暗殺者1「シルバーにゼノ？にクルト？」

クラピカが反応する、俺に気がついたようだ

(クルトは今サングラスにニット帽をしている)

暗殺者2「ゼノ？にクルト？そんな色あつたか？？」

ゼノ「二人ともただの本名じゃあ、そっちの若いのもそうじゃあろつ」
クルト「ああそうだ」

シルバ「俺の名を呼ぶのは勝手だか指図は受けない」
クルト「それは俺も同感だ」

暗殺者3「シルバにゼノ？クルト？まさかあんたらゾルディック家か！！」
それにあんたは一ツ星ハンターの白き閃光のクルト！」

ゼノ「いかにも」

クラピカ「（あれがキルアの家族か、あきらかに他の連中と威圧感が違う訳だ、
それにクルトさんまでいるとは念を覚えて改めて見てみると威圧感が違う」

なんとか対抗できそうなのは残りの二人か」

暗殺者4「別にいいじゃん呼び名なんて」

暗殺者5「.....」

クルト「とにかく俺は一人でやらしてもらう組みたい奴は勝手に組んでやるといい」

暗殺者2「ちよつとまで、相手は」

クルト「話が無いなら俺はこれで」

そう言い残し部屋を出る、部屋を出て1時間してころ

クラピカ「クルトさん待ってください」

クルト「なんだクラピカ俺と協力しようってことか？

お前試験の時の様子が違うな場所を移すか

(ポンズ少し通信を切ってくれ)」

ポンズ「(了解です)」

クルト「ここなら大丈夫だな、お前人を殺したな……」

クラピカ「うっ……」

クルト「俺が言えたことじあないが一人で抱え込むなよ、

お前には仲間がいるだろう？今は耳に入らないかもしれないが

覚えて置いてくれ」

クラピカ「分かりました覚えておきます、

ところでクルトさんはなぜこんな依頼を？」

クルト「ブラックリストハンターをやつてるとたまに

こういった仕事の依頼もあるんだ、今回はA級の賞金首の蜘蛛だから受けたが

暗殺は俺の専門外なんで賞金首以外の暗殺の依頼は受けないさ」

クラピカ「それを聞いて安心しました、それとゴンが会いたがってましたよ」

クルト「そうかそのうちな（ゴンとはほとんど接触してないのになぜだ？）」

クルト「それよりクラピカ死ぬなよ、またな」

クラピカ「クルトさんも気お付けて」

ビルの外が騒がしくなってきた

クルト「（ポンスきたようだ外の様子を探ってくれ）」

（ポンス side）

クラピカと何をはなしたか気になるが気持ちを切り替えよう

師匠に言われて蜂で周囲を探索するとまるで戦場と化した街並みがそこにあつた

こんな奴ら私が戦うなんて考えたくない……………

しばらく探索すると刀を持ったチョンマゲ男と

素手で首をへし折っている男の二人組みを見つけた

ポンス「（見つけました、外見的特徴は

刀を持ったチョンマゲ男とこちらは特徴はないんですが

素手で攻撃している男の二人組を発見しました、セメタリービルより

2 km北の地点にいます」

クルト「（ありがとう、戦闘を見るのはいいが巻き込まれないよう距離を離して置くように）」

探索しか出来ない今の自分の実力に歯がゆい思いと、クルトが無事に帰ってくるように祈るポンスであった

ポンス side End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183z/>

HUNTER × HUNTERの世界

2011年12月31日01時48分発行